の如く霞の如く、小梅洲崎の兩村、貴賤市をなすに至る、かく鶯の音色を賞する事も、二百年來の太平の御恩澤、ことに五十年來の盛事、實にめでたき御代のためしと謂つべし、其會の盛なる比、鳥屋萬藏と云者、四方の某といへる酒肆へ售たる雛を、四方春と號けて會に出せしに、順の一となりしかば、帝木塚といふ處の豪家、若干の黄金に易て請得しより、其名いよ〳〵高く聞えぬ、

鶯名所

〔東都歳事記一正月〕鶯立春の十五六日目頃より新聲を發す　神田社地　小石川鶯谷　谷中鶯谷三崎の大通りより西のかたへ入る　根岸の里里諺に、關東の鶯はなまりあれども、このたれにて一入聲うるはしき由、古しへよりいへり、

〔續江戸砂子五〕四時遊觀

黄鸝　根岸の里　東叡山北の麓なり

凡關東の諸鳥の聲は、みなだみたるといへり、此里の鶯は、元祿のころ御門主樣より、上方のうぐひすをあまた放させられしその卵なるゆへ、聲だみざるといふ、

〔吉野詣記〕十一日、〇天文二十二年三月けふは住吉へとぞ思ひたちける、こゝなる人のいふやう、この八尾〇河内といふ所は鶯の名所なり、よの常のは尾十二枚重れり、此の所のは尾を八重ね優れたる由申しけり、

契りおきてこゝにぞきかむ鶯の八尾のつばき八千歳の聲

鶯事蹟

〔大和物語下〕よしみねのむねさだの少將、ものへゆく道に、五條わたりにて雨いたうふりければ、あれたるかどに立かくれて見いるれば、〇略中ことひとなど見えず、あゆみ入てみれば、はしのまに梅いとおかしう咲たり、鶯もなく、人有ともみえぬみすの内より、うすいろのきぬ、こききぬのうへにきて、たけたちいとよきほどなる人の、かみたけばかりならんとみゆなる、

よもぎをひてあれたるやどを鶯のひとくとなくやたれとかまたむ、とひとりごつ、少將、

きたれどもいひしなれねばうぐひすの君につげよとをしへてぞなく、ところゑおかしうてい